

## 初級学習者への語彙指導 —キーワード法の日本語学習への応用—

小木曾 左枝子  
カーディフ大学

### 要旨

本稿では、認知心理学分野の教授法の一つとして考案され、第二言語における語彙学習にも有効な方法とされる「キーワード法」の日本語学習への応用について論じる。キーワード法の利点と問題点を検討した上で、筆者が初級日本語学習者を対象に行った授業でのキーワード法導入の試みから、その考察を述べる。

【キーワード】 語彙学習、語彙指導、語彙習得、キーワード法、初級学習者

### 1 はじめに

近年、第二言語習得研究において語彙指導の重要性が認識されてきているが、日本語教育の現場ではどのように語彙指導が行われているだろうか。実際の現場では、語彙指導は使用教科書に依存する、または授業を行う担当教師に任せる傾向があるのではないだろうか。そのため、多くの学習者が語彙学習を負担に感じているのが現実であるが、それにも関わらず、体系的・組織的な指導が考えられていないことが多いのではないだろうか。

第二言語語彙学習において、学習者が有効な語彙学習ストラテジーを身につけることは非常に重要なことだと考えられている。日本語の語彙学習及び語彙指導においても、教育の現場で語彙学習ストラテジーを学習者が身につけられる指導をどのように行うかを考えていくことが大切ではないだろうか。また、日本語教育の場合、語彙学習というより漢字学習に焦点が当てられる傾向があるように思われる。実際、語彙学習と漢字学習とに一線を引くのが難しいこともあるが、第二言語習得研究における語彙学習の観点から日本語教育における語彙指導を考えてみることも必要ではないだろうか。

### 2 キーワード法とは？

第二言語教育における語彙学習法の一つに「キーワード法」がある。キーワード法は、認知心理学的知見にもとづいた教授法の一つで、第二言語における語彙学習に有効なことが実証されている。このキーワード法は 1975 年に Atkinson (Atkinson 1975; Atkinson and Raugh 1975) により提唱されたもので、イメージ媒介による対連合学習方法で、また記憶を促進するストラテジーとしても認められている。

日本語教育では、仮名学習や漢字学習には、イメージ媒介方略を用いた教材等が開発されているが、語彙学習法としてイメージを利用したこのキーワード法はあまり知られていないのではないだろうか。また、他の言語（スペイン語、イタリア語、ドイツ語、ロシア語、ギリシャ語、タガログ語等）ではその有効性を検証する研究が数多く行われているが、日本語学習者を対象に行ったキーワード法の実証研究はあまりない。

#### 2.1 キーワード法のプロセス<sup>1</sup>

キーワード法は、2つの段階から構成された学習法で、第1段階では、第二言語の新出語と発音が類似する第一言語もしくは知っている他の言語の語を探す。これが

「キーワード」となる。第一言語と第二言語の音韻的類似は、部分的なものでも構わない。第 2 段階では、第 1 段階で見つけたキーワードと第二言語の語の意味を結びつけるイメージを考える。

具体例<sup>2</sup>を挙げて説明すると、英語を第一言語とする日本語学習者が「刀」という語を覚えようとする。その際、第 1 段階で「かたな (*katana*)」の第一音節と類似する第一言語の語「cat (猫)」をキーワードとして選ぶ。そして、第 2 段階で「猫侍が刀を振る (a samurai cat waving a sword)」様子をイメージとして使い、音声情報としての「かたな (*katana*)」を第一言語での翻訳同義語 (意味情報) である「sword (刀)」と結びつけることができる。この際、実際に心にイメージを描き、視覚化することが重要とされる。この方法で覚えると、「刀」という語を見たり聞いたりしたとき、「cat」という語が想起されると同時に、「猫侍が刀を振る」というメンタルイメージが活性化されることになる。

表 1: キーワード法の例

<p>第 1 段階: 第一言語 (知っている他の言語) で第二言語の新出語と発音が類似する語 (キーワードとなる語) を考える。</p> <p>第二言語の新出語: 「刀」 “<i>katana</i>”  <small>かたな</small></p> <p>キーワード: “cat”</p>
<p>第 2 段階: キーワードと第二言語の新出語の意味を結びつけるイメージを考える。キーワード法は以下の 4 つの情報から形成される。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 第二言語の新出語: 「刀」 “<i>katana</i>” <small>かたな</small></li> <li>2 キーワード: “cat”</li> <li>3 第二言語の新出語とキーワードを結びつけるイメージ: “a samurai cat waving a sword” (猫侍が刀を振る)</li> <li>4 第二言語の新出語の意味: “sword”</li> </ol>

## 2.2 キーワード法の利点

単なる「語呂合わせ」のような方法に誤解されることがあるが、キーワード法は、音声情報の結びつけ、意味情報の結びつけ、そしてイメージの結びつけが行われ、これらの相互作用で記憶の向上を図り、語の定着に有効性があることが認められている。日本語教育では、ひらがな・カタカナ、漢字の文字学習には、このようなイメージ媒介方略が使われることもあるが、ひらがな・カタカナの場合は、イメージと音声情報の結びつけだけで、漢字の場合はイメージと意味情報の結びつけだけの場合が多い。ここで言う語彙学習におけるキーワード法は、「音声情報」、「意味情報」、そして「イメージ」の 3 つの情報の結びつけが、「音連結 (acoustic link)」と「心象連結 (imagery link)」の 2 段階の連結を利用して行われるため、その相互作用で、語の定着が促進されることから、有効な記憶方略であると言われている。

キーワード法の実証的研究には、実験群と統制群を設け行い、キーワード法を用いた実験群の語彙記憶 (語の保持) が優れていることをテスト結果から分析し、その有効性を報告しているものが多い (Atkinson 1975; Atkinson and Raugh 1975; Pressley, Levin and Miller 1982)。また、その有効性を他の語彙学習法と比較した実践的研究も数多く行われている (Ellis and Beaton 1993; Cohen 1987; Pavio and Desrocher 1981;

Pressley, Levin and Delaney 1982; 野呂 2003; 林 2002)。文脈による学習と比較した研究では、キーワード法による学習のほうが優れているとの報告がされている。また、口頭反復練習と比較し、効果を検証した研究でも、キーワード法のほうが語彙習得を促進するという結果が出ている。そして、キーワード法を用いた語彙学習における幾つかの実験結果から、「外国語、自国語を問わず、キーワード法は語彙学習を改善するものであると結論できる<sup>3)</sup>」(Pressley, Levin and Miller 1982, p.51; 林 2002, p.30)と述べている研究もある。

キーワード法の特徴であり、また利点とも言える点は、「キーワードを介して語とその意味の間に緊密な連結関係を構築する」ことであり、また「連結関係が一旦強固にできあがれば、記憶にとどまる可能性が高く、また想起も確実かつ迅速に行われる」(林 2002, p.30) ことである。そして、キーワード法を用いることにより、限られた時間で相当数の語を学習できるということも長所として報告されている。

### 2.3 キーワード法の問題点

2.2 で述べたように、キーワード法の有効性を実証する研究は数多くあるが、また同時にその問題点も指摘されている (Ellis and Beaton 1993; Cohen 1987; Pavio and Desrocher 1981; Pressley, Levin and Delaney 1982; 野呂 2003; 林 2002)。まず、キーワード法を用いて覚える語が抽象語の場合、キーワードを介してイメージを描くのが具体語より難しいという問題が挙げられる。また、実証的研究の多くが具体語を使用して行われていることも問題点として指摘されている。そして、教師側が提示するにしろ、学習者が自分で考えるにしろ、キーワードを介してイメージを描くということに時間や労力が要求されるため、効率的な学習法ではないということも指摘の一つである。

また、キーワード法を学習段階のどの段階で用いるのが効果的かということも問題になる。入門期、初級段階では効果があるが、中級以降はその有効性があまり見られないということも指摘されている。その理由としては、中級以上の学習者になると、自分の経験から学習方法が確立されていることが多く、また文脈から未知語の意味を類推することもできるため、キーワード法のような学習法を用いる必要がないということが挙げられる。入門期、初級の段階では語の意味(母語での訳語)を覚えることだけでも十分かもしれないが、中級以上になるとそれだけでは十分ではないことから、キーワード法を用いて訳語を覚えても、実際のコミュニケーションでは役に立つ知識になり得ていないことなども問題として挙げられている (Pavio and Desrocher 1981)。

その他、キーワード法は学習言語を第一言語に訳す理解テストには有効だが、その反対の産出テストには有効性が見られないことも指摘されている。これは、キーワード法が学習言語の語彙の正確な発音を再生することを要求しない学習法である故であり、また正確な発音を身につけるといった点においては適していないことも指摘されている。

## 3 キーワード法の授業への応用

このキーワード法は問題点も指摘されているが、数多くの研究が発表されており、第二言語習得研究における語彙学習、語彙指導などに関する文献でも、有効な方法の一つとして紹介されている。また、実際に筆者が教えている学生を見ても、日本

語の語と音が似ている英語の語を関連づけて語彙を覚えようとする学生もいる。しかし、音声情報を結びつけただけの単なる語呂合わせのような場合が多いので、より効果的な方法を紹介することができないかと考え、このキーワード法を授業の一環として取り入れることにした。残念ながら、実用的な研究は数が少なく、授業へ応用するための確立された形式があまりないため、利点及び問題点を考慮した上で、授業でどのようにキーワード法を導入するかを考えた。

表 2：学習者に関する情報

学習者	： 日本語専攻の大学 1 年次の学生
学習者数	： 13 名（男性 3 名、女性 10 名）
国籍	： イギリス 9 名、アメリカ 1 名、スペイン 1 名、ブルガリア 1 名、中国 1 名
レベル	： 初級（CEFR レベル A1 終了程度）
学習時間数	： 週 10 時間（キーワード法導入時の学習総時間数は 130 時間程度）
授業形態	： 語彙学習の特別セッション（50 分）
使用教科書	： 『みんなの日本語 初級』（キーワード法導入授業では第 27 課及び第 28 の語彙を学習）

上記の表 2 はキーワード法を用いて授業を行った学習者に関する情報である。表 2 にあるように、対象は大学で日本語を専攻している 1 年次の学生である。大学生にこの種の学習法が適しているかどうかであるが、大学生にとってもキーワード法は有効な学習法になりうるという先行研究（Taguchi 2006）もある。授業の形態としては、通常の授業の一部に取り入れる形ではなく、語彙学習の特別セッションとして授業を行う形式をとった。

### 3.1 授業構成

表 3：授業の流れ

①	キーワード法がどのような語彙学習法なのかを説明する。
②	語彙リストから覚えるのが難しい語を 5 つから 10 選び、タスクシートにその語とその語の意味を書くよう指示する。
③	キーワード法を使い、自分が選んだ語を覚えるために、そのキーワードとイメージを考え、タスクシートに書くよう指示する。
④	3 人～4 人のグループに分かれ、意見交換を行うよう指示する。

授業は、上記の表 3 にまとめてある流れで行った。まず、教師がパワーポイントを使い、キーワード法とはどのような語彙学習法なのかを、具体例を挙げながら説明した。そして、学生は語彙リストから覚えるのが難しい語<sup>4</sup>を 5～10 選び、タスクシートにその語とその語の意味を書き込む。コースで使用している教科書は『みんなの日本語 初級』で、その週は第 27 課と第 28 課が学習予定の課で、語彙リストとして配布したその 2 課分の総語数は 63<sup>5</sup>だった。タスクシートは、電子版にも学生がアクセスできるようにし、コンピューターを使って作成するという選択肢も与えた。

次に、学生はキーワード法を使って自分が難しい語として選んだ語を覚えるために、各語のキーワードとイメージを考え、タスクシートに書き込む。イメージは、絵を描いてもいいし、言葉でイメージを説明してもいいし、またはその両方でもいいと指示した。実際にコンピューターを使って作成した学生はいなかったが、電子

版のタスクシートを使う場合は、グーグルなどのイメージ検索を利用してもいいことも伝えた。また、この作業は、1人ではなかなかキーワードが連想できなかつたり、イメージが浮かばなかつたりすることもあるので、近くに座っている他の学生と相談してもいいことも付け加えた。この作業が終わった段階で、タスクシートにはキーワード法に必要な4つの情報(表1参照:新出語、キーワード、イメージ、語の意味の4つ)が書かれていることになる。最後に、3人~4人のグループに分かれ、意見交換を行い、その後、グループの代表がまとめて自分たちのアイディアをクラス全体に発表するという形式をとった。

### 3.2 キーワード法を使用した語の例

実際に学生が難しい語として選びキーワード法を使って覚えた語彙だが、13名の学生が1人5~10の語に対してキーワード法を考え、総計98になった。どのような語彙を選んだかということだが、品詞別に見ると、まず、動詞は全部で14あったが、そのうち9語の動詞に対するキーワード法が出てきた。その9語<sup>6</sup>のうち、「噛む」に対するキーワード法を考えた学生が7名と一番多かった。この語に対しては、7名全員が日本語の既習語彙である「紙」若しくは「髪」をキーワードとして選び、「紙を噛んでいる」または「髪を噛んでいる」というイメージを使い、音声情報と意味情報を連結させていた。以下は学生がタスクシートに書いたイメージ<sup>7</sup>をまとめたものである。

表4: キーワード法の例「噛む」

新出語	: 噛む (かむ)	イメージ:
意味	: To chew, bite	“Chewing kami (paper)”
キーワード:	紙	“Someone chewing kami (paper)”
	かみ (paper)	“Small child shouldn't chew kami (paper)”
	Kami 髪	“Kami (hair), people chew kami (hair)”
	(hair)	“Some people chew their kami (hair)”
		“A woman chewing her kami (hair)”

名詞では、カタカナ語は除いた29の名詞のうち22の語<sup>8</sup>に対するキーワード法が出てきたが、その中で「道具」と「歌手」が7名と一番多かった。これも動詞の「噛む」の例と同じく、この2つの語に対してほとんどの学生が同じキーワードを使っていた。「道具」に対しては全員が「Dog (犬)」をキーワードとして選び、表5にあるように「道具を持っている犬」または「道具を使う犬」をイメージとして使い、音声情報と意味情報を連結させていた。

表5: キーワード法の例「道具」

新出語	: 道具 (どうぐ)	イメージ:
意味	: Tool, instrument, equipment	“A dog holding a tool”
キーワード:	Dog	“A dog using a tool”
		“A dog bringing a tool”
		“A dog bringing tools to its owner”
		“Dog with a hammer (tool)”
		“Dog with a hammer (tool) in mouth”

「歌手」に対しては、ブルガリア語が母語の学生を除き全員が「カシュー（ナッツ）」をキーワードとして選び、「カシューナッツが歌を歌っている」または「歌手がカシューナッツの歌を歌っている」というイメージを使い、音声情報と意味情報を連結させていた。

表 6：キーワード法の例「歌手」

新出語：	歌手（かしゅ）	イメージ：
意味：	Singer	“Cashew nuts singing” “A singing cashew nut” “Someone singing about cashew nuts”
キーワード：	Cashew (nuts)	“I like Cashew” <sup>9</sup>

その他、形容詞及び副詞は語彙リストにはそれぞれ 5 語あったが、ともに 4 つの語<sup>10</sup>に対するキーワード法の例が出てきた。また、語彙リストには接続詞も 2 つあったが、そのうち 1 つの接続詞<sup>11</sup>に対してキーワード法を考えた学生が 1 名いた。これらに付け加え、語彙リストには 8 つのカタカナ語があったが、カタカナ語に対してキーワード法を考える学生はいなかった。これは、英語圏の大学で学習する学生にとって、カタカナ語を見たり聞いたりして理解するのは問題がないためだと思われる。

### 3.3 授業からの考察

3.1 で説明した流れで授業を行うことを考えた際、学生が自分で音声情報となるキーワードを選び、そして意味と結びつけるイメージを構築できるかということが懸念事項であったが、1 名を除き、全く問題なく取り組んでいた。問題があった 1 名の学生は、中国語が母語の学生で、音声情報の結びつけとなるキーワードを考えるのが難しい様子であった。それがその学生の言語学習経験に因るものなのか、または母語が表意文字であり日本語の語彙が同じく表意文字である漢字を含むため音声情報の結びつけが難しいのか、1 名の学生の、1 回の授業だけからその要因を分析することは不可能だが、この学習法に対する学習言語と学習者の母語の相関性を検証することも興味深いかもしれない。

学生からのフィードバックとしては、もう少し早い段階でこの方法を紹介してほしかったという声が挙がった。やはり、毎週覚えなければならない語彙の数を考えると、語彙学習を負担に感じる学生は多く、様々な学習法を知ることは役に立つと考える学生が多いようである。今回、筆者が試みたキーワード法の導入は、語彙学習の特別セッションとして 1 回の授業で行ったが、授業の編成の仕方によっては、授業の初めに毎回行うという方法<sup>12</sup>もある。

また、キーワード法を学習者自身に考えさせる方法と、教師側が与える方法があるが、理論的には学習者が自分で考えたほうが深い処理が行われるため、語の定着がいいと言われている。しかし、実験によっては教授側が媒介イメージをわかりやすく絵にして呈示したほうが効果があるという結果がでてきているものもある。今回、筆者が行った方法では学習者自身に考えさせたが、3.2 で提示した例のように、第一言語が同じ学習者の場合、考えるキーワードに共通性がでてくることも考えられる。そのような場合は、教師側が呈示したほうが効率がいいかもしれない。

キーワード法をはじめ、直接的語彙学習（明示的語彙学習）は、時間と労力がかかるという問題点がある。特に、このキーワード法の場合は、音声情報、意味情報、イメージの結びつけを考えなければならず、労力が要求されると同時に、全て語にキーワードやイメージを考えるのが難しいことが問題である。よって、記憶方略、または学習法の一つとして、入門期、初級の学習者に紹介し、特に覚えにくい語に活用するよう勧めるのがいいのではないだろうか。

#### 4 まとめ

第二言語における語彙習得、語彙学習分野の第一人者の1人である Paul Nation は、語彙指導における教師の重要な役割を4つ提唱している。Nation (2008, p. xii) は、教師にとって一番重要な役割は「学習者にとって適切な語彙学習プログラムを考え、実施すること」、二番目に重要な役割は「学習者が有効な語彙学習ストラテジーを身につけられるように指導すること」<sup>13</sup>だと述べている。

語彙学習だけに限らないが、適切な学習プログラム、学習法、学習ストラテジーを検討する際、どのような条件でも有効なものというのは存在しない。キーワード法の利点及び問題点を考えた場合、「入門期や初級の学習者が、具象名詞や形容詞、動詞といった基本単語を見たり聞いたりするとき、まずそれらの意味がわかるように（松見 2002, p.105）」ということが目標であれば、キーワード法は有効な記憶方略であり、語彙学習プログラムに取り入れ、学習法、学習ストラテジーの一つとして導入していくことは意義があることではないだろうか。

注.

<sup>1</sup>ここで紹介するキーワード法のプロセスは Nation (2008, p.111) をもとにしたものである。

<sup>2</sup>ここで紹介している「刀」の例は Schmitt (2000, p.121) をもとにしたものである。

<sup>3</sup>Pressley, Levin and Miller (1982, p.51) の原文が林 (2002, p.30) で訳されているものを使用。

<sup>4</sup>このキーワード法の語彙学習セッションは、週の初めの月曜日に行ったので、その週の学習語彙をまだ覚えていない学生がほとんどであった。

<sup>5</sup>この総数は『みんなの日本語 初級』第27課及び第28課の新出語数とは一致しない。

<sup>6</sup>「噛む」以外に学生がキーワード法を考えた動詞は「踊る、選ぶ、飼う、違う、走る、通う、建てる、開く」である。

<sup>7</sup>実際に学生が書いたイメージは、表4、表5、表6にあるような言葉で書いたもの、絵を描いて表したもの、またはその両方を使い表されたものがあつた。

<sup>8</sup>「道具、歌手」以外に学生がキーワード法を考えた名詞は「鳥、夢、声、台所、花火、習慣、通信販売、自動販売機、昼間、小説、色、値段、波、力、番組、将来、経験、給料、自分、会話」である。

<sup>9</sup>このイメージは、歌手の絵を描き、“I like cashew”を歌詞として書いている例である。

<sup>10</sup>学生がキーワード法を考えた形容詞は「まじめな、偉い、熱心な、ちょうどいい」で、副詞は「たいてい、はっきり、ほとんど、しばらく」である。

<sup>11</sup>学生がキーワード法を考えた接続詞は「それで」である。

<sup>12</sup>Taguchi (2006) では授業の一部にキーワード法を取り入れる方法が紹介されている。

<sup>13</sup>筆者訳。

<参考文献>

- Atkinson, R. C. (1975) Mnemotechnics in second-language learning. *American Psychologist* 30: 821-828.
- Atkins, R. C. and Raugh, M. R. (1975) An application of the mnemonic keyword method to the acquisition of a Russian vocabulary. *Journal of Experimental Psychology* 104 (2): 126-133.
- Cohen, A. D. (1987) The use of verbal and imagery mnemonics in second-language vocabulary learning. *Studies in Second Language Acquisition* 9 (1): 43-62.
- Ellis, N. and Beaton, A. (1993) Factors affecting the learning of foreign language vocabulary: Imagery keyword mediators and phonological short-term memory. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology* 46A (3): 533-558.
- Nation, I. S. P. (1990) *Teaching and Learning Vocabulary*. Boston, Massachusetts: Heinle & Heinle Publishers.
- Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I. S. P. (2008) *Teaching Vocabulary: Strategies and techniques*. Boston: Heinle, Cengage Learning.
- Paivio, A. and Desrochers, A. (1981) Mnemonic techniques in second-language learning. *Journal of Educational Psychology* 73 (6): 780-795.
- Pressley, M., Levin, J. R. and Delaney, H. D. (1982) The mnemonic keyword method. *Review of Educational Research* 52 (1): 61-91.
- Pressley, M., Levin, J. R. and Miller, G. E. (1982) The keyword method compared to alternative vocabulary-learning strategies. *Contemporary Educational Psychology* 7: 50-60.
- Schmitt, N. (2000) *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taguchi, K. (2006) Should the keyword method be introduced in tertiary foreign language classrooms? *Electronic Journal of Foreign Language Teaching* 3 (1): 22-38.
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語 初級Ⅱ』, スリーエーネットワーク.
- 野呂忠司 (2003) 「外国語の語彙学習と指導法」, 『英語のメンタルレキシコン』 門田修平編著, 266-304.
- 林洋和 (2002) 『英語の語彙指導-理論と実践の統合をめざして-』 溪水社.
- 松見法男 (2002) 「第二言語の語彙を習得する」, 『日本語教育のための心理学』 海保博之・柏崎秀子編著, 97-110.